

| | | | |
|---|------|------|------|
| <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; display: inline-block;">~2022</div> <h1 style="margin: 0; padding-left: 10px;">ソーシャルワーク研究</h1> | 単位数 | 履修方法 | 配当学年 |
| | 4単位 | R | 1・2年 |
| | 担当教員 | 田中 尚 | |

■授業のテーマ

ソーシャルワーカーの実践力の向上及び実践環境の構築とそのために必要とされるソーシャルワーク理論

■授業の目的

学生が身につけるべき資質・能力の目標：

ソーシャルワーカーの実践力の向上とそのための実践環境の課題について多角的に検討し、そこに必要とされるソーシャルワーク理論についての理解を深める。その理解を基に課題の分析力を養い、研究的視点を獲得する。同時に、人材育成に関わる実践のための知識や技術を学び、実践力の基盤を身につける。

■授業の到達目標

1. 社会福祉実践におけるサービスの質向上とソーシャルワーカーの実践力の向上と人材育成について理解する。
2. ソーシャルワーク分野における実践力の向上と人材育成の現状と課題について説明できる。
3. ソーシャルワーク分野における実践力の向上と人材育成の現状を、歴史的な変遷や他国・他分野との比較において論じることができる。
4. ソーシャルワーク分野における実践力の向上と人材育成にソーシャルワーク理論がどのように関係しているかを理解し、実践への適用を試みることができる。
5. 上記の理解・知識をもとに、それぞれの研究課題に取り組むことができる。

■授業の概要

ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成は、一般的な「福祉教育」、教育機関による専門教育、実践現場での研修やスーパービジョンなど、重層的に行われているが、ソーシャルワーク分野は、従来の福祉六法の範囲はもちろんで、新たな分野にも広がりを見せており、それらの領域での人材不足は実践現場で深刻な問題となっている。ここでは、学生それぞれが自身の関心分野・領域を定め、それについて文献調査を行い、実践力の向上と人材育成に焦点を当て、その歴史的経緯をたどる、あるいは、他国や他分野との比較を試み、その課題を抽出する。さらに、ソーシャルワーク理論やその価値とするところを確認し、現状やその課題を検討する。検討の枠組みとしては、ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成の実践に使用する知識・技術の基盤となる認知・行動理論やエコシステム論など、ソーシャルワークの主要理論を使用する。ジェネラリスト・ソーシャルワークの理解を踏まえて、ミクロ・メゾ・マクロの各視点からのソーシャルワーク実践の理解を深め、価値を生み出すキーワードとして、社会構成主義の観点を取り上げ、実践を批判的に分析することを行う。

■在宅学修15のポイント

| | 学修のテーマ | 学修内容(・キーワード) | 学びのポイント |
|----|----------------------------|---|--|
| 1 | 社会福祉研究の基本的考え方 | 質的研究、量的研究、文献調査、参加観察、面接、アンケート、フィールドワーク、エスノグラフィー、研究倫理 | 様々な研究方法があること、研究倫理の遵守が必須であることを理解する。社会福祉研究論文の幾つかを読み、研究論文の例として参考にする。 |
| 2 | ソーシャルワークの全体像の把握と確認① | ソーシャルワークにおける価値観 | 社会構成主義とは何か、その歴史的な位置付けは何かを文献から知る。 |
| 3 | ソーシャルワークの全体像の把握と確認② | エコシステム理論 | 生態学的視点とシステム論について調べる。 |
| 4 | ソーシャルワークの全体像の把握と確認③ | エコシステム理論の実践適用 | ミクロ・メゾ・マクロ、および各システムの相互作用について、実例を用いて考察する。 |
| 5 | ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)① | 教育機関におけるソーシャルワーク教育 | 参考文献を中心に文献調査より、歴史、組織、カリキュラムなどについて調べる。 |
| 6 | ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)② | 現場における育成・訓練 | 現場における学びの特徴、OJT、Off-JT、Self Development、研修体制について調べる。 |
| 7 | ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)③ | スーパービジョン | 定義、種類、機能、プロセス、技術、倫理、体制について調べる。 |
| 8 | ソーシャルワーカー育成の歴史・制度 | 他国との比較 | アメリカ、イギリスなど、他国の現状と人材育成やその制度の歴史を文献から学ぶ。 |
| 9 | 人材育成に関する理論① | 認知・行動理論 | 教育や認知・行動理論の基本を学ぶ。 |
| 10 | 人材育成に関する理論② | 精神分析・人間性心理学 | 知の諸相について理解する。 |
| 11 | ソーシャルワーカーの実践力向上① | 個人への介入 | 心理療法・カウンセリングの諸アプローチ・技術を意識する。 |
| 12 | ソーシャルワーカーの実践力向上② | 家族への介入 | 家族療法の視点からシステム論的思考のあり方を理解する。 |
| 13 | ソーシャルワーカーの実践力向上③ | 組織への介入 | 社会構成主義の観点から現状を考察する。 |
| 14 | ソーシャルワーカーの実践力向上④ | 制度への介入 | ミクロ・メゾ・マクロの相互関連性を理解する。 |
| 15 | ソーシャルワーカー育成上の課題 | ソーシャルワーク価値との比較検討 | ソーシャルワークサービスの質とソーシャルワーカーの実践力の向上との関連を理解し、人材育成の現状と課題についてソーシャルワークが尊重する価値に基づき批判的に考察する。 |

■レポート課題

| | |
|------|--|
| 課題 1 | 自身の関心によって、以下の3つのテーマの中から1つを選択し、テーマに関する文献調査を踏まえて報告する。レポートの初めには、何を示すための報告であるかを明記する(4,000字程度)： 1. ソーシャルワークにおけるエコシステム理論の意義とその実践について 2. ソーシャルワークにおける社会構成主義の意義とその実践について 3. ソーシャルワークにおける認知・行動理論の意義とその実践について |
| 課題 2 | ソーシャルワークの理論とその実践における課題、実践上のジレンマ(ジレンマへの対応を含めて)について、報告する(4,000字程度)。 |

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス



授業の到達目標、概要などを読んで、レポートで取り組む内容をできるだけ絞ることが大切です(広すぎると与えられた文字数では、学部教科書レベルの内容をまとめただけになってしまいます)。また、大学から送られてくる参考文献だけでは求められるレポートの質に到達することが困難であるため、自

身の関心に従ってレポート課題（テーマ）に関する文献を探し出す努力が必要です。大学からの参考文献は、そのためのガイドと考えてください。

課題2
アドバイス

目標は、ソーシャルワーカーの実践力の向上とその実践環境についての検討・分析能力を高めることにあるため、それを意識して、価値・理論・知識・技術を選び、具体的な理解までを目指してください。上記の内容以外でも構いませんが、実際に実践・事例を検討・分析に使うことを念頭に選んでください。

■評価の方法・基準

課題レポート1、課題レポート2は、可のレベルに到達するまでは再提出とする。その後の単位修得試験結果を成績評価とする（100%）。各課題と試験の評価基準は以下のとおり：

- ① 論文としての形式（構成や文献表記など）に則っていること。
- ② 各段落や文章構成が論理的であること。
- ③ 課題内容に即した内容であること。
- ④ 社会福祉研究法についての知識を使用したレポートであること。

■参考文献（*印=大学から送付される必読図書）

- 1) 一般社団法人日本社会福祉学会編集（2012）『対論 社会福祉学5 ソーシャルワークの理論』中央法規出版。
- * 2) 久保紘章・副田あけみ（2005）『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店。
- * 3) 日本社会福祉学会機関誌（最新版）『社会福祉学執筆要領「引用法」』（コピー）
- 4) 伊藤淑子（1996）『社会福祉職発達史研究：米英日三カ国比較による検討』ドメス出版。
※ 4) の図書は、新品在庫僅重版予定無しのため配本できませんが、非常に大切な内容ですので、中古を入手する、または図書館で借用するなどしてお読みください。
- 5) 好井裕明（2006）『「当たり前」を疑う社会学』光文社新書。
- 6) Schon, D. (1984) The reflective practitioner: how professionals think in action, Basic Books. (=2001, 佐藤 & 秋田訳『専門家の知恵』ゆみる出版.)
- 7) 小池和夫編（2006）『プロフェッショナルの人材開発』ナカニシヤ出版。
- 8) Polanyi, Michael (1996) The tacit dimension. Routledge & Kegan Pau. (=1980. 佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店.)
- 9) 金井壽宏（2012）『実践知』有斐閣。
- 10) Gergen, K. (1999) An invitation to social construction, Sage. (=2004, 東村知子訳『あなたへの構成主義』ナカニシヤ出版.)
- 11) Flick, Uwe (1995) Qualitative forschung. (=2002, 小田他訳『質的研究入門』春秋社.)
- 12) 平山尚他（1998）『社会福祉実践の新潮流』ミネルヴァ書房。
- 13) 太田義弘（1992）『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房。
- 14) 遊佐安一郎（1984）『家族療法入門：システムズ・アプローチの理論と実際』星和書店。
- 15) Toseland, R & Rivas, R. (1998) An introduction to group work parctice (=2003, 野村豊子監訳『グループワーク入門』中央法規出版.)
- 16) Obholzer, A. & Roterts V. Z, (2006) The unconscious at work: individual and organization stress in hte human services, (=2014, 武井麻子監訳『組織のストレスとコンサルテーション』金剛出版.)
- 17) 高良麻子（2017）『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル』中央法規出版。
- 18) Goldstein & Noonan (1999) Short-term treatment and social work practice. Simon & Schuster, inc. (=2014, 福山和女他監訳『総合的短期型ソーシャルワーク』金剛出版。